
もっと

ホタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もつと

【Nコード】
N3913A

【作者名】
ホタル

【あらすじ】
人生とか人間関係とかにちょっと不安になったときに早苗は現れ、そして消えた。

だから僕は泣いた。

さなえがやって来たから。

泣いて、ああそうなんだって思った。

この瞬間を待っていたんだと。

「ごめんね」

さなえが謝ることなんてどこにも無いのに。

まるで迷子になった子供をあやすようにさなえは謝って僕に触れ、抱きしめ、頭を撫でた。

だから僕だって子供のように泣いた。ぐちゃぐちゃになって流れる涙は僕が求めていた人生その物だったんだと思うと余計に泣けた。

「さなえ、これだったんだよ」

さなえはうんうんと頷いた。

いつからか何も求めていないと思っていた僕の人生は結局全てを求め、その浅はかな欲求で得られたものはとても小さく、乾いた小麦粉のように指の隙間からするするとこぼれ落ちた。僕は途方にくれ、ある日夕日を追いかけてみたけれど、僕が向かおうとすると道路があつて、建物があつて、果てしなく遠くて、簡単に僕をさす夕日をただ偉大に感じてやつぱり途方にくれて立ちつくした。

「すきって言うって」

そう言った彼女に好きだよと言ったら怒って泣かれた。

友達にはばかだな。って笑われたから、僕もいっしょになって笑ったけれど、何が可笑しいのか解らなかった。いや、実際には解っていたのかもしれない。彼女が求めていたことを僕が気に入らなくて、それが彼女にとって拒絶を感じて悲しんだこと。そして、彼女が求めたものを解っていながら、それを与えないことを友達は笑った。

彼女が求めたのは絶対的な安心感だった。彼女が冬の寒い部屋に置かれる炬燵のような安心感と、その上においてある甘ずっぱい蜜柑のような刺激を求めていることはいつだって解っていた。だけどそんな中、僕がしたいのは雪合戦だった。

価値観の違いに彼女との関係は半年で切れた。

もう彼女は作らない。

そう決心した翌日さなえとで会った。

腐った林檎は美しい。とさなえは言った。

腐っても存在するその存在が美しいと。

そして、腐った林檎を捨てるのはいつだって余裕がない人間なんだ。と彼女は言った。

「私はね、感情つてもっとぐちゃぐちゃだと思っの」

酔ったさなえが言った言葉に僕は頷いた。

「ほんとはもつとぐちゃぐちゃなのに、それがとても熱くて、熱くて熱くて触れるのが怖くて、一日一日が通りすぎていつてしまう」

「ぐちゃぐちゃなことなんて、単純な言葉じゃ表現できないから」

僕は何となく相槌をうつてセックスをした。

くだらないセックスをして、抱き合ったら、なんだかそれが心地よくて全てがどうでも良くなつて一日中抱き合つて眠りに着いた。

世の中がくだらないとか、つまらないだとか、糞だとか、厭世的になるつもりは全く無かったけれど、重要なこととか、大切なものなんてけっこ些細でだけど繊細で、脆くて壊れやすくて、すぐ埋もれてしまう。だからこそ大切なのに、だからこそ、確からしさを求めてしまう。それが時には言葉や詩で、ある時には行動や表情で、またあるときは一輪の花だったりする。

「ほんととは社会だつてぐちゃぐちゃなんだ」

黒いコーヒーを淹れながら彼女が言った。ミルクは最初螺旋を描き、そして滲んで混ざり合つと黄土色になった。

「そうだね」

実際そうだと思った。

もつと暴力的で、欲望的で、狂氣的なんだと。

「でも、それだけぐちゃぐちゃだったらここにコーヒーはなかっただろうね」

そう言うとき彼女は笑った。

「人はコーヒーを飲むために、聖書を作って、法律を作ったのかもね」

三日間そんな話をして、抱き合って、コーヒーを飲んでさなえはいなくなった。

朝目を覚ますと、隣で寝ているはずのさなえはいなかった。さなえの行動を縛る約束も何も無いのに、当然今日も明日もいると思っていたのに、さなえは突然消えた。

僕はバイトを探した。

さなえのいない毎日はただ目の前を通り過ぎる他人のように通り過ぎた。

時給800円のバイト代は規則正しく振り込まれ、規則正しく所得税は取られ、規則正しくぼくは不味いコーヒーを飲んだ。

一日一日は不毛にただぶかぶかと海に浮かぶ糸の切れた浮きのように流れた。

ある日店長が驚いた。それは僕に対しての驚きで、気がついたら涙を流していた。

冷たく流れる涙に僕はバイト先から逃げ出した。

人はこんなにも簡単にこんなにも冷たい涙が出るものなんだと、それがまた悲しかった。

きつとバイトはクビになっても、今日までの給料はやっぱり払われて、コーヒー代と生きていくのに何とかなるくらいのお金は手に出来るのがなんだかひどく悲しかった。

たださなえに逢いたかった。

ぐちゃぐちゃになるためには様々なことを捨ててしまふんだ。

社会も、羞恥心も自尊心も、きつと全部捨ててやっとなれるのに、僕にはやっぱり出来なくて、小さな地図の上を右往左往するように

さまよった。

お腹が空いても、何かを食べるために金を払うことになんだか罪悪感を感じて、なにも考えず、ただふらふらと歩き続けた。

さまよった先に、さなえはいた。

さなえがいなくなつて三ヶ月が過ぎていた。

「さなえ」

僕が言うと

「ひさしぶり」

何事も無かつたかのようにさなえは言つた。

僕はふらふらで、さなえはとても健康そうだった。

さなえは絵を売っていたけれど、なんだかそれは自分の人生を切り売りしているように見えた。それがさなえの才能なんだと思うとただ切なかつた。

切なさは美しいと思うと、愛しくなつた。感情は勝手に流れて、涙のように溢れるけれど、僕が存在はさなえに吸い込まれて空になつて、こころは粉々に砕け散つた。

僕も絵が描けたらよかったのに、そうすればさなえへの想いが、表現できたかもしれない。だけど、僕は絵がかけない。

いつの間にか僕はいつかのように夕日を追いかけていた。さなえが僕を呼んだけれど、僕の名前に意味は無かつた。

さなえが走つてきて、僕はさなえとキスをした。

（後書き）

なんとなくこんな感じのも逢ってもいいんじゃないかと思って書いた作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3913a/>

もっと

2010年10月8日15時27分発行